



一岐手前の谷にも水田が開け、見事なヤマフジがあつた

の滝は思いの外あつけなく眼前にあつた。県道からおよそ六〇〇メートルほどの距離である。高さ約一五メートルのこの滝を境に市野と上平が分かれる。滝の左側崖の中央よりやや高い壅みの所に不動明王が祀られているといわれたが、昼なお暗い渓谷に視認することはできなかつた。出会つたのは音もなく竿を出す若い釣り人だつた。聞くと、細い流れながらイワナやヤマメが混棲しているのだという。

上平から二岐へ向かうと四〇〇メートルほどの台地が出てくる。洪積世末期の河岸段丘で、旧道脇には貝の化石も出土する名勝屏風岩があつた。谷奥はかなりの程度に水田が開かれている。二岐の地名は明神ヶ岳北麓を源流とする支流がここで合流するからか、川の名も二岐川という。唐澤さんによれば、かなり上流まで遡行すればブナの樹林もあるとのことだつたが、「この暑さでは長物出るな」の

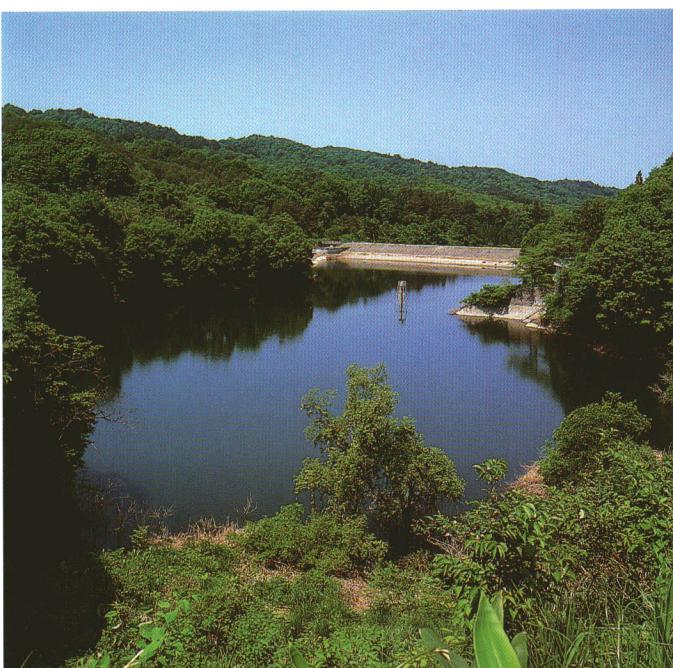
話に即、断念した。長物とはどうやらマムシをさしてのことらしい。

## 古代の息吹

仏沢を通り二岐ダムを過ぎて松坂に至ると、それまでのV字形の深い浸食地形と違つて、ようやく谷底が広くなる。ここから佐賀瀬川までは、一度堆積された谷底が再び浸食され始めた地形で、階段状に水田が開拓されている。縄文式土器や石器が出土し、仏教文化導入時期を知らせる古刹があり、中世の山城もあるという複合遺跡の集積地で、新鶴村の古代の息吹はここから始まる。

「一説には原始時代日本海方面の民族が盛んに新天地を求めて移住し、会津へは阿賀川を遡上して支流の宮川（鶴沼川）へ入り、更に支流の逆瀬川中流の丘陵地（佐賀瀬川部落の西約一K）館が沢に堅穴住居の村落を形成した。当時稲作の知らぬ祖先族は身に獸皮をまとい山野に鳥獣を追い、木の実や球根を探掘し河

上から辿つていくとまずは西麓の河谷壁に沿つて、まるで区画整理をしたかのような正方形の敷地が水田に張り出しているのが見え



る。草むしているので判然としないが、唐澤さんによれば大日山一二坊の寺家跡という。

その背後には山麓にかけて天文三年（一五三四年）大日如来が遷座した大日山、坊数一二宇の寺山、坊舍跡、そして医王山常福院がある（現在は新屋敷）という一大聖域でもあつた。

そして佐賀瀬川をはさんで対岸の館が沢には二六基もの堅穴住居跡がある。『広報にいつる』に連載されている「新鶴村の隠れた文化財に、唐澤さんの文で紹介されているので、それを抜粋してみよう。

「一説には原始時代日本海方面の民族が盛んに新天地を求めて移住し、会津へは阿賀川を遡上して支流の宮川（鶴沼川）へ入り、更に支流の逆瀬川中流の丘陵地（佐賀瀬川部落の西約一K）館が沢に堅穴住居の村落を形成した。当時稲作の知らぬ祖先族は身に獸皮をまとい山野に鳥獣を追い、木の実や球根を探掘し河